

# 御館神社古墳発掘査報告

～普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～  
1

1993年3月

善通寺市教育委員会

## 序

善通寺市は高僧空海（弘法大師）誕生地として知られる門前町です。白鳳期には立派な寺院が建立されていますが、この古代文化は突然に出現したものではなく、それに遡る時代にすでに大陸文化を享受できる環境が整っていたのです。

この地の人々の生活は縄文時代に始まり、弥生時代には肥沃な土地を基盤に開始された稲作に支えられて、人口が増加し集落が広がります。

そして古墳時代ともなると、私たちの想像をはるかに超えた、高い水準の文化的生活が存在していたことがこれまでの発掘調査などで明らかにされつつありますが、この大集落を造り出した指導者の存在が、極めて重要なものであったことは疑う余地もありません。

人々は指導者の墓を築く聖域を集落南西部の谷部、有岡地区に求めました。ここには古墳時代全時期にわたり築かれた数多くの古墳が確認されており、全国的にみても有数の古墳地帯であることが知られています。中には史跡指定を受けたものも数多くありますが、指定を受けたもの以外にも重要な遺跡が多数残されていることは言うまでもありません。

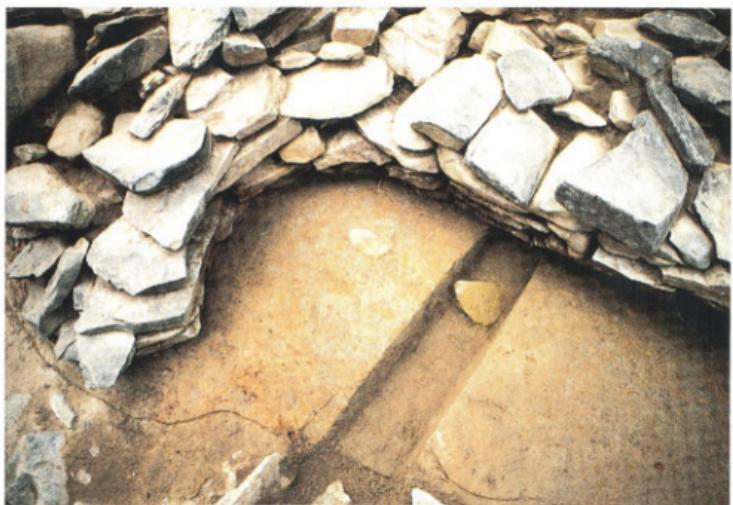
この度調査が行なわれました御館神社古墳もその一つですが、まさに善通寺市の古墳文化の基礎が造られた古墳時代前期の数少ない指導者の墓であることが確認されたのです。

このたびの報告書刊行にあたり、ご指導をたまわりました諸先生各位に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査に携われた調査関係者、及びご協力頂きました関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成5年3月31日

普通寺市教育委員会  
教育長 勝田英樹





第1図 御館神社古墳竪穴式石室検出状況（南から）



第2図 御館神社古墳墳丘北側トレンチ（墳裾部の葺石）

## 例　　言

1. 本書は善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業（善通寺市内遺跡発掘調査事業）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は善通寺市善通寺町宇宮が尾3151（御館神社境内）に所在する前期古墳において平成4年10月1日から平成5年3月31日まで実施された。
3. 本書の編集作成は善通寺市教育委員会文化振興室主事笹川龍一が行った。
4. 補助事業の中で実施された、横穴式石室の実測や墳丘周辺部の測量調査及び遺物の実測は四国学院大学考古学研究会の協力を得て笹川が行った。
5. 本事業及び本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大な御指導・御援助並びに資料提供を得た。また、調査期間を通じても多大な御指導、御援助並びに資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

坪井清足、石野博信、新池功成、香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財調査センター、四国学院大学考古学研究会、國木健二

## 目　　次

序(1頁)・カラーグラビア(3頁)・例言(5頁)・目次(6~7頁)

第一章 遺跡周辺の地理と歴史	7
第二章 調査の概要	14
① 調査に至る過程	14
② 墳丘周辺の地形測量調査	14
③ 墳丘の発掘調査	16
④ 橫穴式石室の発掘調査	23
第三章 ま　と　め	24

## 挿 図 目 次

第1図 御館神社古墳堅穴式石室検出状況	3
第2図 御館神社古墳墳丘北側トレンチ	3
第3図 普通寺市遠景	7
第4図 調査地と周辺の主要遺跡	9
第5図 御館神社古墳位置図	13
第6図 昭和45年頃の御館神社古墳	14
第7図 御館神社古墳周辺地形実測図	15
第8図 第2トレンチ出土遺物実測図	16
第9図 第1トレンチ実測図	17
第10図 第2トレンチ実測図	18
第11図 第3トレンチ実測図	19
第12図 第4トレンチ実測図	19
第13図 第5トレンチ実測図	20
第14図 第6トレンチ実測図	20
第15図 第7トレンチ実測図	21
第16図 第8トレンチ実測図	22
第17図 第9トレンチ実測図	22
第18図 堅穴式石室実測図	25・26

## 図 版 目 次

第19図 第1トレンチ検出状況	28
第20図 第1トレンチ南端・石列検出状況	28
第21図 第2トレンチ検出状況	29
第22図 第2トレンチ南端・版築土層堆積状況	29
第23図 第3トレンチ検出状況	30
第24図 第4トレンチ検出状況	30
第25図 第5トレンチ検出状況	31
第26図 第6トレンチ検出状況	31
第27図 第7トレンチ検出状況	32
第28図 第8トレンチ検出状況	32
第29図 第9トレンチ検出状況	33
第30図 御館神社と境内に残る墳丘	33
第31図 御館神社境内に残る墳丘	34
第32図 堅穴式石室発掘調査作業状況	34
第33図 堅穴式石室完掘状況	35
第34図 調査後整備された堅穴式石室	35
第35図 堅穴式石室掘方・南西端壁部	36
第36図 堅穴式石室北東端壁部の石材抜取跡	36

## 第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が包含されていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。



第3図 善通寺市遠景（山塊の背後が古墳地帯であり、手前に集落遺跡が広がる）

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、機内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。そして、更にこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間に、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約3,000年前まで遡ることができる。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりか、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに実施された発掘調査を順に紹介すると、総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡の調査から始まる。ここでは弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田城の拡大が行なわれたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘



第4図 調査地と周辺の主要遺跡 (1:50,000)

調査が実施されたが、ここでは約1,500m<sup>2</sup>の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の堅穴住居跡・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが発見され、特に弥生時代終末期の堅穴住居跡からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡・多數の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となつた。

ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年10月から昭和63年1月まで都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の堅穴住居跡や小児壺棺墓・箱式石棺等が確認されている。

九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

ここから北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居跡群や墓地、中世の建物跡群が多数確認されている。こうした集落遺跡群は旧地形をみると、いずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであることがわかるが、これまでの調査結果をみるといずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“地方都市”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅鉢1口の計8口、我拝師山遺跡では計3ヵ所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目されている。

1. 水井遺跡	9. 旧練兵場遺跡群	12. 大塚池古墳	20. 北原古墳	⑧ 開10号墳
2. 中ノ池遺跡	① 彼ノ宗遺跡	13. 磨白山祭祀遺跡	21. 瓦谷1号墳	⑨ 開11号墳
3. 三井遺跡	② 仙遊遺跡	14. 磨白山古墳	22. 御館神社古墳	⑩ 開13号墳
4. 五条遺跡	③ 村田庵寺(白鳳)	15. 鶴ヶ峰山頂古墳	23. 宮野尾古墳	⑪ 夫婦岩1号墳
5. 稲木遺跡	④ 善通寺西遺跡	16. 鶴ヶ峰4号墳	24. 宮尾2号墳	⑫ 夫婦岩2号墳
6. 石川遺跡	⑤ 善通寺伽藍(奈良)	17. 丸山古墳	25. 野田院古墳	27. 大麻山極貸塚
7. 九頭神遺跡	10. 下吉田神社古墳	18. 王墓山古墳	26. 開古墳群	28. 大麻山絆塚
8. 甲山北遺跡	11. 青龍古墳	19. 菊塚古墳	⑥ 開5号墳	29. 陣山古墳群
			⑦ 開5号墳	30. 宝輪寺跡(白鳳)
■:銅鐸出土地	□:銅劍出土地	△:銅矛出土地		31. 麗葉城跡(中世)

古墳時代に入つてもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を超える古墳が存在し、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高405m)のテラス状平坦部という全般的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古段階の前方部盛り土後円部積石塚である。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野鍔子塚古墳(消滅)・磨臼山古墳・鶴ヶ峰2号墳(消滅)・鶴ヶ峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現するが、中には宮ガ尾古墳に代表されるような線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、様々な点で興味は尽きない。

この頃の人々の生活の場は、後期を中心とした弥生時代の集落域と重複しており、旧練兵場遺跡をはじめ、善通寺市街地から北に広がる水田地帯で数多くの集落遺跡が確認されており、有岡地区を中心に各地に立派な古墳群を残した集団と各集落との関係が注目されている。

古墳時代になると弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸龜平野という肥沃な生産基盤を背景に、特定の有力者が独自の技術により灌漑治水事業等を行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者として生まれ変わり、有岡地区一帯に数多くの古墳を築いたが、この権力者(豪族)層は奈良時代には貴族層に変る。

この頃の丸龜平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯一族の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い古墳が造られなくなるが、既に白鳳期には佐伯の氏寺である仲村庵寺(伝導寺跡)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、その際に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末頃佐伯氏に弘法大師(空海)が誕生したことによって、平安時代から室町時代にかけては門前町として栄え、鎌倉時代から室町時代初期にかけて寺院の最盛期を迎える。

地名も寺名そのまま普通寺村となるが、戦国時代には殆どの寺院は焼失してしまう。

寺社の復興は江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからであり、この頃四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となる。

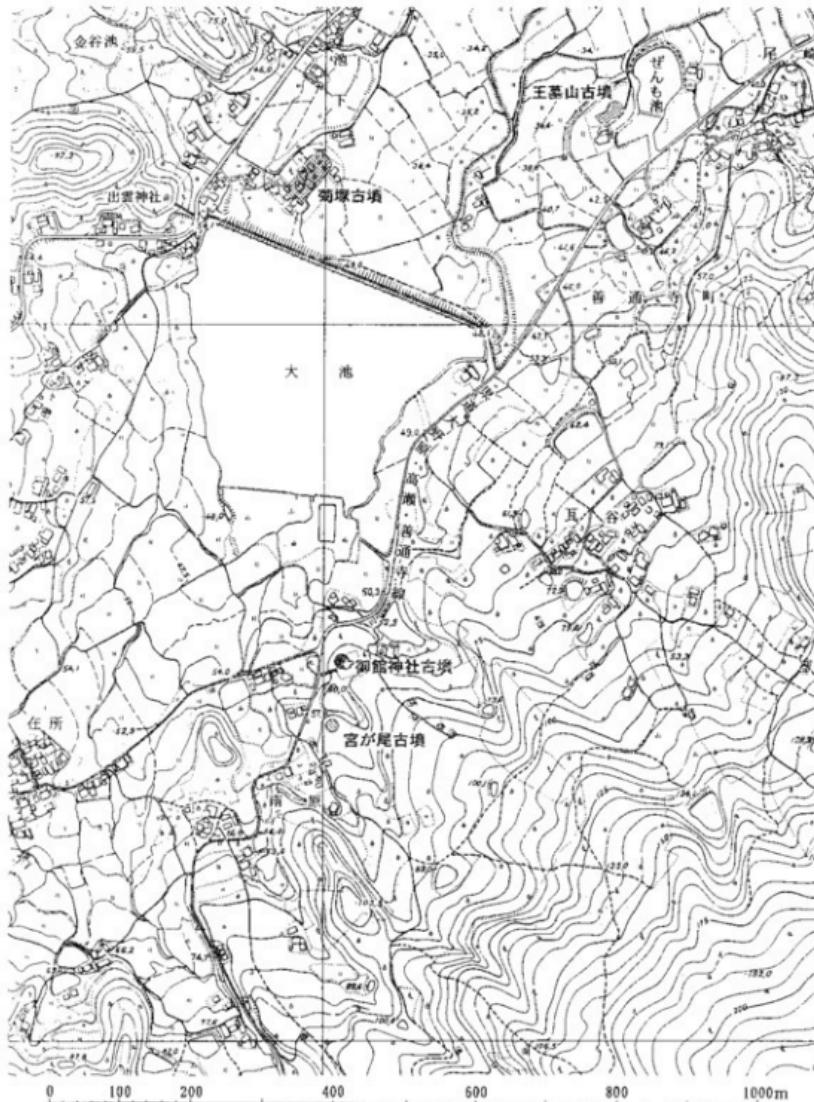
明治29年には第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになつたが、このため道路や鉄道網が整備された。そして善通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村と合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

#### 参考文献

『善通寺市の古代文化』	善通寺市	1973年11月
『善通寺市史』	善通寺市	1977年7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『仲村廐寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年3月
『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年3月
『稻木遺跡』	稻木遺跡発掘調査団	1989年3月
『仲村廐寺』	善通寺市教育委員会	1989年3月
『史跡有岡古墳群(王墓山古墳)保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年3月

#### ～四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告書～

『中村・乾・上坊遺跡』 第一冊	香川県教育委員会	1987年3月
『矢ノ塚遺跡』 第三冊	香川県教育委員会	1987年10月
『稻木遺跡』 第六冊	香川県教育委員会	1989年3月
『永井遺跡』 第九冊	香川県教育委員会	1990年12月



第5図 御館神社古墳位置図

## 第二章 調査の概要

### ① 調査に至る過程

御館神社古墳は大麻山北西麓の先端に構築された前期古墳であり、墳丘は御館神社境内に残るが、戦後の社殿改修時に境内地拡張を目的として多量の土砂が搬入されているため本来の地形はかなり改変されている。また墳丘も大半が削り取られているため、その形態も明確ではない。

付近の主要古墳としては史跡指定を受けた王墓山古墳や宮が尾古墳（装飾古墳）、周濠を有する菊塙古墳などが知られているが、本墳に匹敵する前期古墳は存在しておらず、この地の古墳時代前期の社会環境等を考える上で貴重な資料であると考えられてきた。

墳丘上には数年前まで松の巨木が數本繁茂していたが、松喰虫の被害を受けて全て枯れてしまったため、押さえを失った墳丘上部の崩壊は加速し、最近では竪穴式石室の一部が露出してしまっていた。

現状のままで放置すると主体部が崩壊してしまう恐れがあったため、市教育委員会では遺跡の重要性を考慮し、県教育委員会と協議の上、埋蔵文化財調査事業として国庫補助を得て遺構の確認調査を実施することになった。



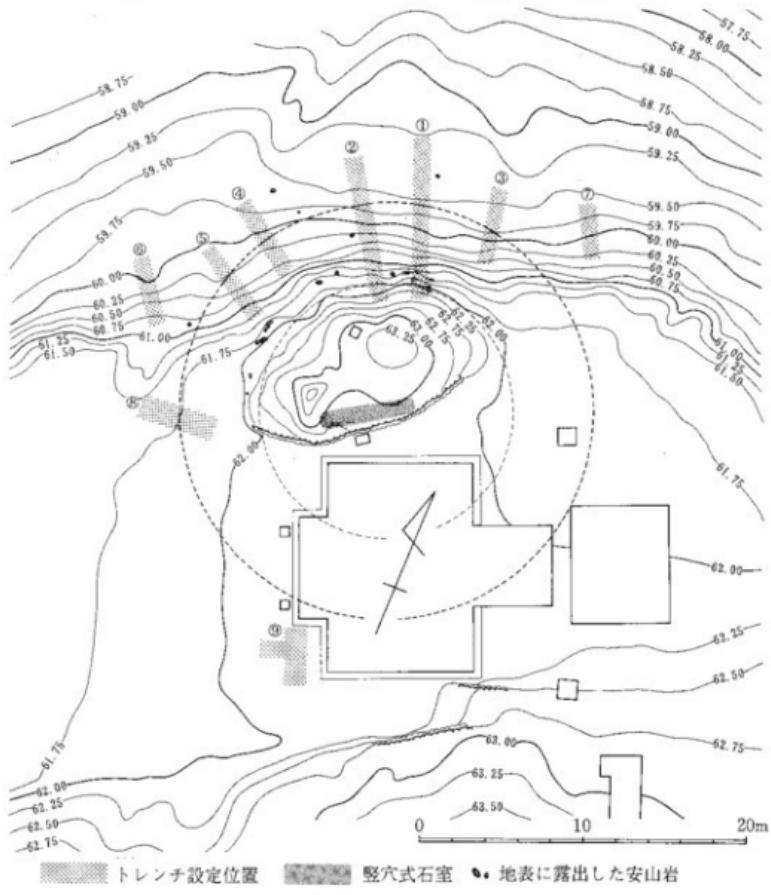
第6図 昭和45年頃の御館神社古墳（南西から）

### ② 墳丘周辺の地形測量調査

社殿北側に残る墳丘は平坦な境内地上では直径16m・高さ1.5m程にしか見えないが、境内地は社殿の改修時に造成されたものであり、当初の地形とはかなり異なったものであることは間違いないと思われた。

当該地が神社境内でもあることから樹木の伐採は行わず下草刈りのみを実施し、平板による地形測量を開始したが、この作業により、比較的斜面が急な墳丘南側下方において墳裾とみられる地形の変化が僅かな範囲に認められた。これを墳裾とすると本墳は、直径 25.4 m・高さ 3.5 m 程の規模となる。

また墳丘北側中段では同一レベル上に安山岩が露出しており、何等かの遺構が埋没していることが予想されたため、ここにトレンチを設定し掘削調査に着手した。



第7図 御館神社古墳及び周辺地形実測図

### ③ 墳丘の発掘調査

地形測量と並行して進められた第1トレンチの掘削調査の結果、表面地形から墳裾部ではないかと予想された位置で人為的な地形の変化が認められたが、この部分を中心に斜面側と下方の平坦部に20~30cm前後の安山岩塊が密集した状態で検出された。これらの石材は遺構面からやや浮いたものが多く、移動している可能性が高いと考えられた。

また墳丘中段部の地表に露出していた石材は、明らかに墳丘内部のものが部分的に露出したものであることが判明した。この列石は墳頂部を取り巻くように直径15.5~16m程の円を描いており、墳丘北側の急傾斜はこの場所を境に墳頂部ではやや平坦となる。

この時点では墳裾で検出された多量の安山岩が墳丘上に葺かれていたものが崩落したものであるかの判断はできない。

そこで第1トレンチ西側に第2トレンチを設定したところ、やはり同様の結果が得られたが、墳丘下方では自然地形を利用し、上部では人為的に多量の土砂が版築状に盛られて墳丘が構築されていることが判明した。なお、第2トレンチでは安山岩直上から須恵器片が検出されたが、これは古墳時代後期のものであり後世の混入と考えられる。

続けて古墳の規模を明確にするため、その両側に墳裾部に限定し規模を縮小した第3~5トレンチを設定した。

第3トレンチは墳裾部から上ではやはり多量の安山岩が検出されたが、下方の平坦部では他と異なる結果が得られた。

第4~5トレンチでは、墳裾部の上方下から多量の安山岩が検出されたが、上方に葺かれた安山岩の遺存状況は良好であり余り動いた形跡が認められない。これは墳裾部から上に2m前後の場所で終わり、最上部付近に比較的大きな安山岩が据えられているが、その様子からこれより上には石は葺かれていなかったものと見られる。

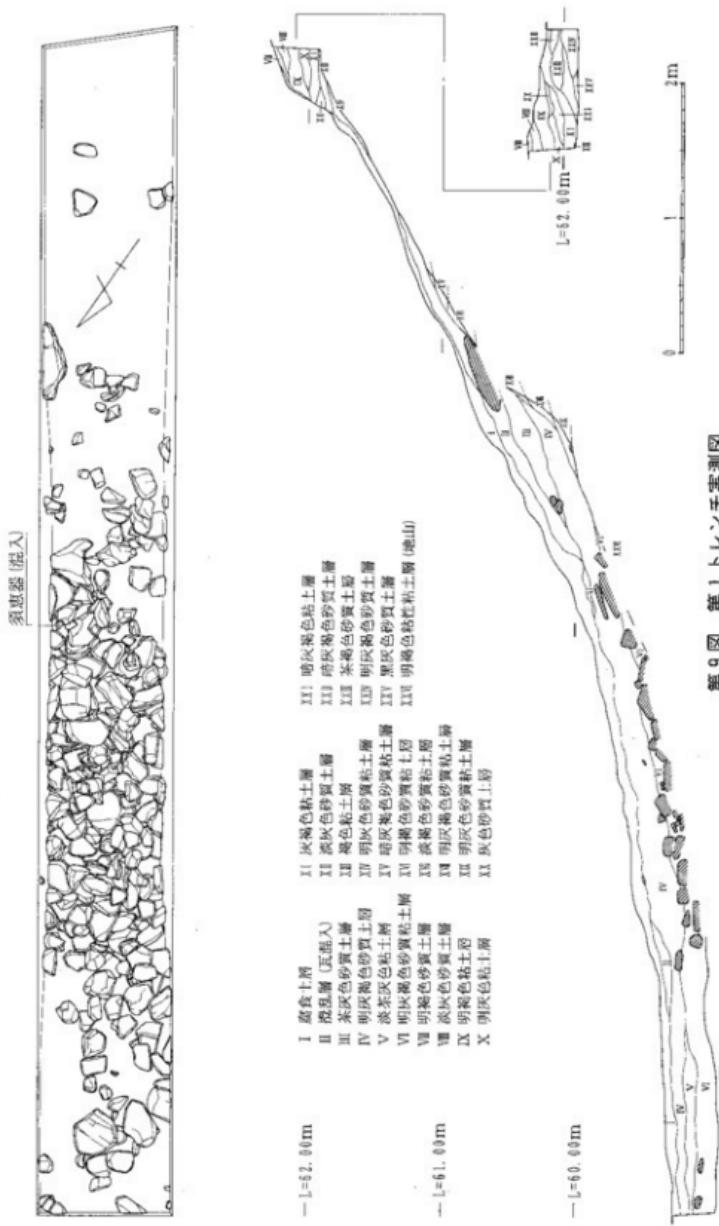
従って墳裾部下方の平坦部の安山岩は崩落したものではないようであり、全体に広がらないことから意図的に祭祀等の目的を持って特定の範囲に配置されたものであることも考えられるが、墳丘北側斜面に葺かれた石材が祭祀等の場を意識したものか、急斜面の土留めを考慮したものかは現状では明らかにできない。

この時点で墳丘の規模や形態がほぼ把握できたが、前方後円墳である可能性も考え、第6~7トレンチを設定し、更に墳丘の形態や規模を明確にするために第8~9トレンチを配置した。

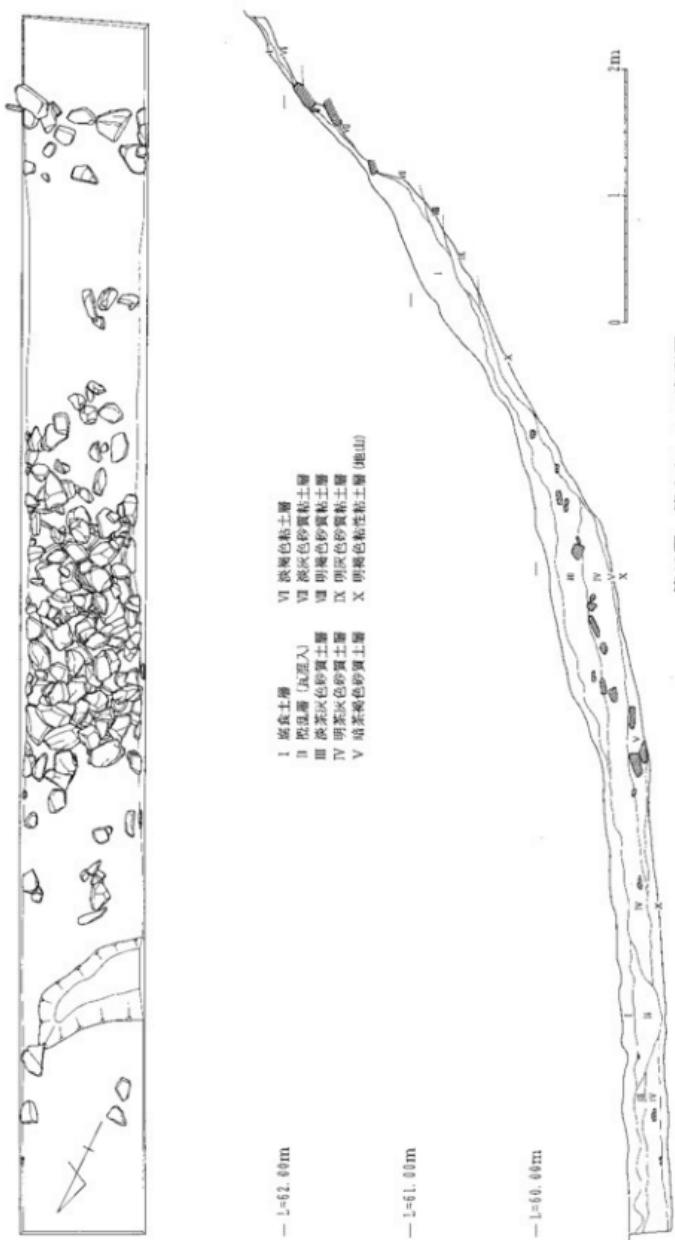


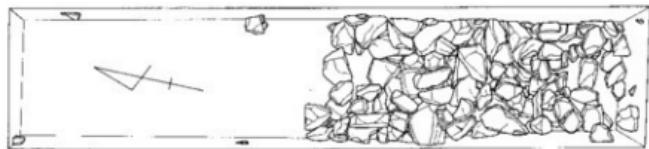
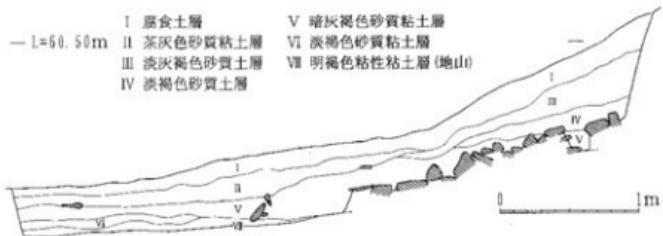
第8図 第2トレンチ出土遺物実測図

第9図 第1トレンチ実測図

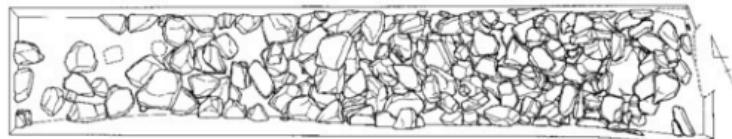
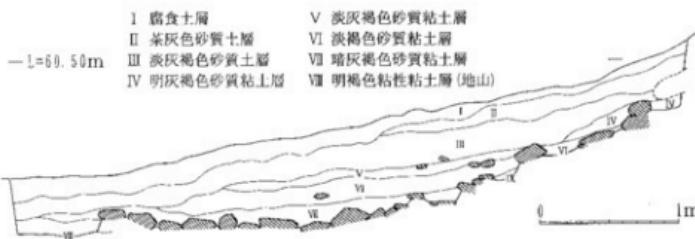


第10図 第2トレンチ実測図

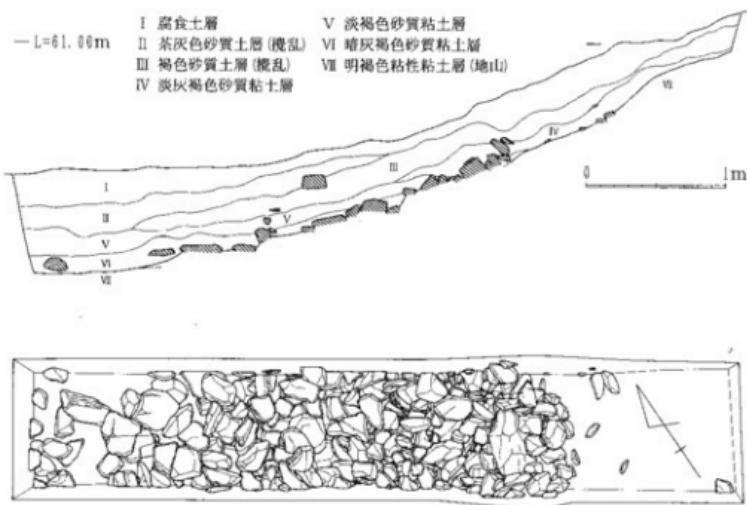




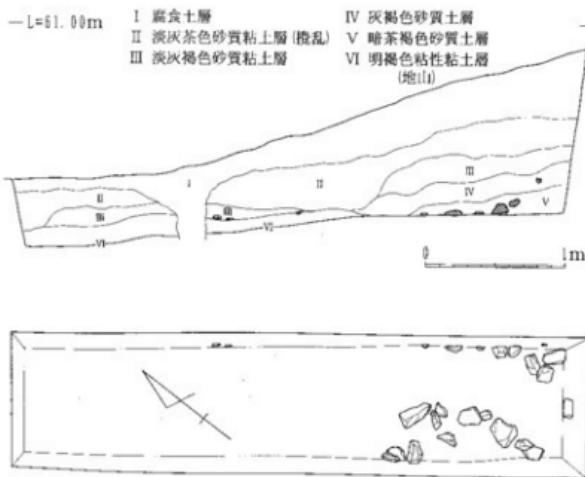
第11図 第3トレンチ実測図



第12図 第4トレンチ実測図



第13図 第5トレンチ実測図



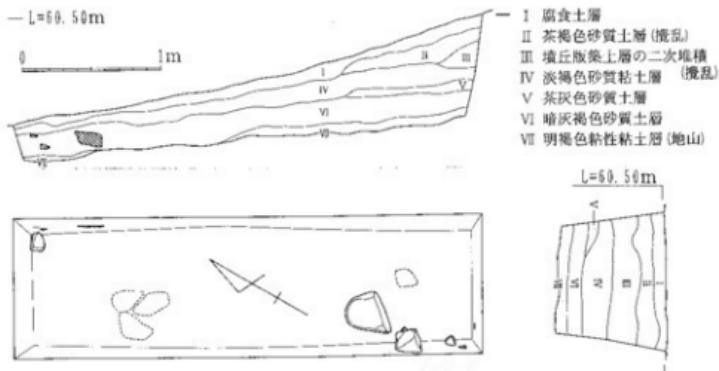
第14図 第6トレンチ実測図

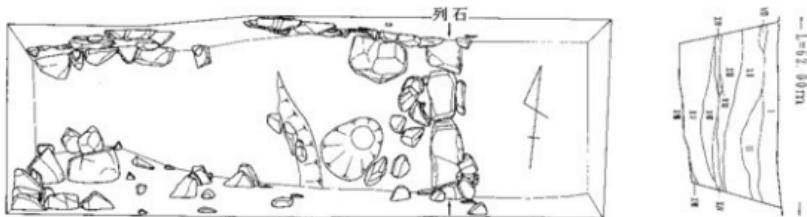
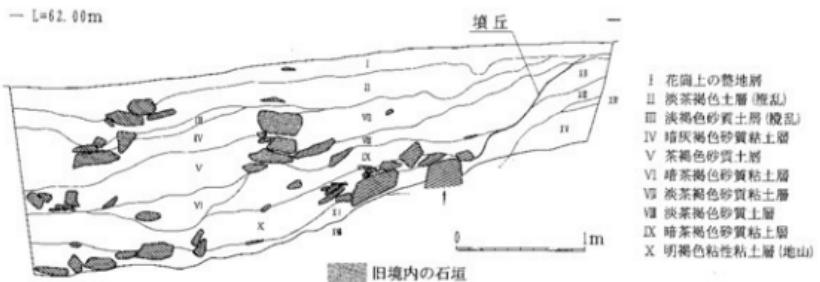
第6～7トレンチでは遺構は確認されなかったが、他のトレンチで確認された墳裾部とほぼ同一レベルの平坦部上に、墳丘上部で見られた版築土層塊が近世頃の瓦片などと共に多量に堆積しており、社殿改修時に造成されていることが判明した。

また第8トレンチを設定した場所は初期の御館神社の石垣部であったらしく、石垣とともに多量の瓦が出土している。石垣が構築された斜面が墳丘西側斜面で、荒らされてはいたが、トレンチ東側において一列に並べた40～50cm程の大型の安山岩塊が検出された。石材は墳丘北側中段で確認された石列と同様に墳丘構築中に設置されたもので、墳丘中に深く根をおろしている。石列の位置は推定される墳裾部からやや中に入るが、この石列下方は擾乱が著しく、当初はこの石列下方にも浅い場所に安山岩が葺かれた状態であったと考えられ、その位置と遺存状況から第4～5トレンチで検出された大型の石材に対応するものではないかと考えられる。

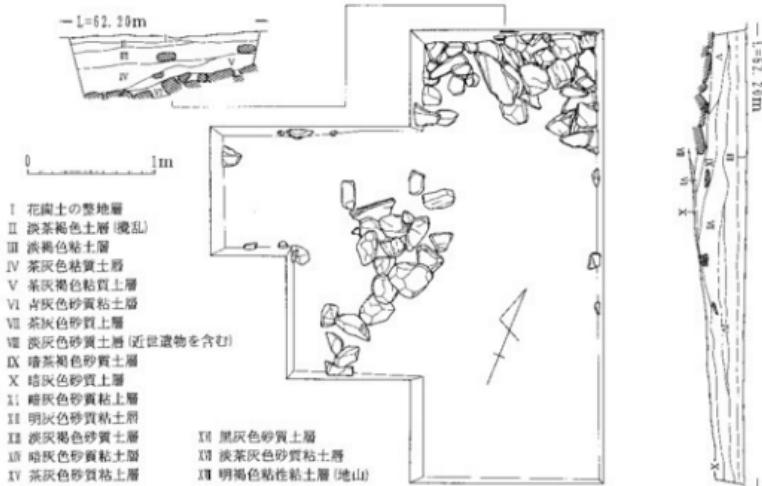
社殿南側は自然の尾根地形であり、ここに前方部が存在するとは考えられないが、墳丘を明確にするため尾根を切断した遺構等が残る可能性を考え、神社総代の了解を得た後に社殿際に第9トレンチを設定した。ここでも安山岩が多量に検出されたが二次的に堆積したものが多く、トレンチ中央部の配石中からは中世頃の土器片が出土している。しかしながらトレンチ東壁面土層を観察すると墳裾側に石材が多数残り、南から一旦下る地面上に墳丘を構成する土砂の二次堆積が認められたことから、本墳は当初想定した規模の円墳であると考えられた。

しかしながら本墳は南から北に下る斜面に構築されているため、墳丘南側が尾根から墳頂部に向かい緩やかな地形であるのに対して北側は急傾斜となる。この部分にのみ多数葺かれた石材は土留めを目的としたことも考えられるが、北側（平地側）から見た墳丘は威容であり、この部分に特別な配慮がなされた可能性も高い。





第16図 第8トレンチ実測図



第17図 第9トレンチ実測図

#### ④ 窪穴式石室の発掘調査

トレッセにより墳丘の概要を把握した後に窪穴式石室の発掘調査に着手した。墳丘上部の不要な石材や腐食土を除去したところ石室北側の側壁上部石列が容易に確認できたが、その方位は南北ではなく南西一北東を指していた。続けて南西側の端壁上部が確認されたが、併せて東側側壁は社殿改修工事の際に完全に失われていることが判明した。

状況から見て、社殿建築に必要な造成作業と併せて平坦地形を造り出すために墳丘を削り始めたが、窪穴式石室北東側の側壁が掘り除かれた段階で古墳であることを確認し、ここで作業を中止した後に、破壊された石室の石材等を用いて土留めの石垣を築いたものと考えられる。

窪穴式石室内部は数箇所に畦を残しながら掘削したが、床面は中央部がやや突出しているが全体的に平坦であり粘土床は確認されていない。石室埋土中にその痕跡も認められないことから存在していなかった可能性も考える必要がある。

また社殿改修の際に石室内部は一旦暴かれたようで、副葬品等は全く出土しなかった。残念ながら遺物が出土したという伝承もない。

南西側の端壁の遺存状況が良好であることから、窪穴式石室の幅は0.9~1.0m程度と比較的広い構造であることが判明した。この部分の両隅は丸味をもって構築されているため端壁は半円を描いているように見える。この丸味は壁体が積み上げる途中で配置される力石によるものではなく、基底部から計画的に積み上げられたもので類例は少ない。

石室側には扁平な板状の石材が使用されているが、掘り方内に裏込めされた石材は不定形のものばかりである。現状では壁面は4~5段しか確認できず、どの程度の高さを有していたのかは不明である。

また、地表付近の攪乱が著しいことから掘り方は明確ではなかったが、部分的に小トレッセを設定し断面を観察した結果、掘り方内全体に石が詰められた状態であり、裏込め石材の外側輪郭が掘り方を示していることが判明した。

また、南西側端壁部は攪乱され基底部の石材まで取り除かれていたが、その抜き取り跡が良く残されていたため、全長が約5.5mであることが判明した。抜き取り跡を観察すると隅部にも石材が配置されていたようで、隅丸構造であったと考えられる。

また、南西側端壁部の遺存状況から石室幅を0.9~1.0m程度と推定したが、同様の石室構造のものには幅が一定でないものも確認されており、本石室の南東側半分が失われていることが大変残念に思われる。石室の主軸方位は石室の幅が一定であるとすればN-33°Eである。

### 第三章 まとめ

御館神社古墳はこれまでに考えられてきた以上に規模が大きく、堅穴式石室や墳丘部に特異な構造がみられた。これは他の地区で確認されている同構造の古墳との比較検討が可能であり、県下では数少ない前期古墳の研究上貴重な資料が得られたことになる。

本墳主体部のように端壁が基底部から計画的に丸く積み上げられたものは希少であり、県下では坂出市の爺ヶ松古墳が知られている程度である。爺ヶ松は後円部積石、前方部が盛土の前方後円墳で全長49.2mを計るが、後円部径25.4mは本墳直径25.4mと一致する。

また爺ヶ松の連結部西裾の一帯に残る列石状配石が御館の第8トレンチで見られた配石に似ている点、爺ヶ松が墳頂に直径15~16.5mの平坦部を持つのに対して、御館の墳丘中段の列石は墳頂部を取り巻くように直径15.5~16m程の円を描いており、これを境に傾斜が変化する点などの共通点が数多く見られる。しかも隅丸石室の方位が北優位でない点やその規模(爺ヶ松石室長5.7m、幅0.9~1.0m)も類似しており、構築時期や被葬者の社会組織内の関係の共通性が考えられる。

隅丸構造の石室については「史跡森将軍塚古墳」(更埴市教育委員会1992.3.30)の中で、四隅とも丸みをもつものが幅広石室に多いことに注目し、「隅丸構造は石室幅を広くするという構築上の要件に耐えるため、側壁と端壁を連続的に構築することで、力石と同様の効力をもって隅部を強固に保つことを指向した」と考察している。そして隅丸石室が畿内以外の地域に多く分布していることを指摘し、「一系統的な構築方法ではなかった」と結んでいるが、御館の堅穴式石室隅丸部の曲線は妙にバランスが取れて美しく装飾的な感すらある。いずれにせよ、当地区を統治した古墳時代前期の首長墓にふさわしい構造であろう。

調査完了後は直ちに造構の埋め戻しを行なったが、堅穴式石室内部は10cm程の土砂を敷く程度にとどめ、破壊されている北東側の端壁部分は新たに石材を積み補強し、石室の構造が見学可能な状況に簡易的な整備を行なった。また神社側の石垣部は間をモルタルで固定し、石室掘り方部分の埋め戻しが完了した後に、墳丘上部に土砂の流出を防ぐために芝を張り保存してあるので是非一度足を運んで頂きたい。

#### 参考文献

- 「堅穴式石室の地域性の研究」都出比呂志 1986.3
- 「森将軍塚古墳」更埴市教育委員会 1992.3.30
- 「香川の前期古墳」日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会 1983.11
- 「爺ヶ松古墳調査概報」香川県教育委員会 1975.6

A L=63.50m

- I 淡褐色土層  
II 灰褐色砂質土層  
III 明灰褐色砂質土層  
IV 淡褐色粘性土層  
V 淡褐色砂質土層  
VI 淡茶褐色砂質土層

A'

B L=63.50m

B'

B

C

C

C'

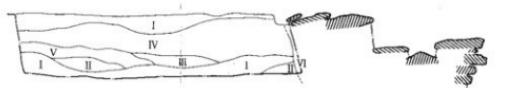
C L=63.50m

0

1

2m

搅乱



第18図 整穴式石室実測図

# 図 版



第19図 第1トレンチ検出状況（北西から）



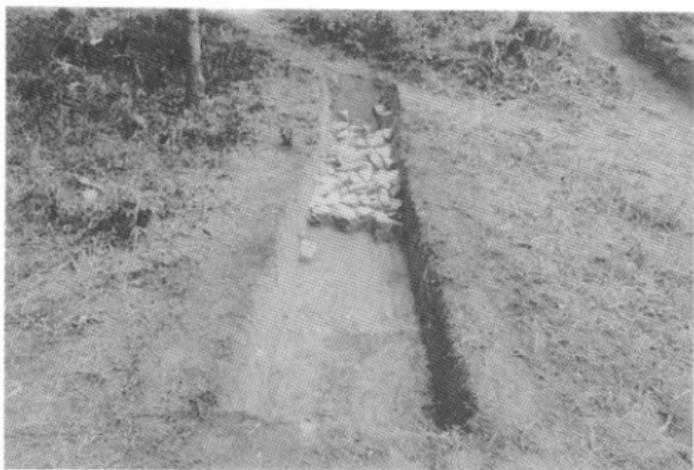
第20図 第1トレンチ南端・石列検出状況（北から）



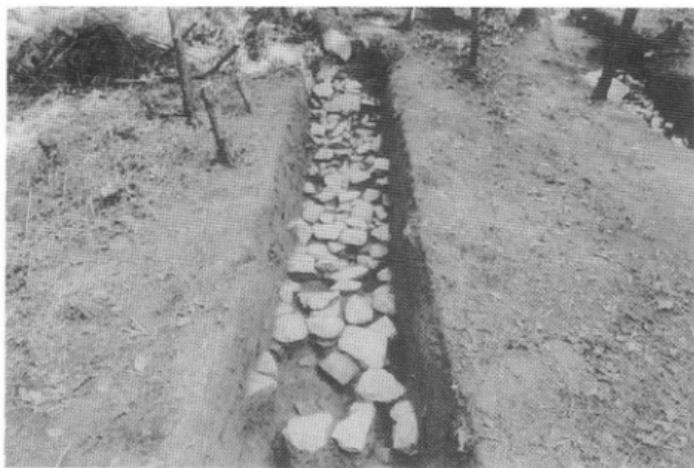
第21図 第2トレンチ検出状況（北西から）



第22図 第2トレンチ南端・版築土層堆積状況（北西から）



第23図 第3トレンチ検出状況（北から）



第24図 第4トレンチ検出状況（北西から）



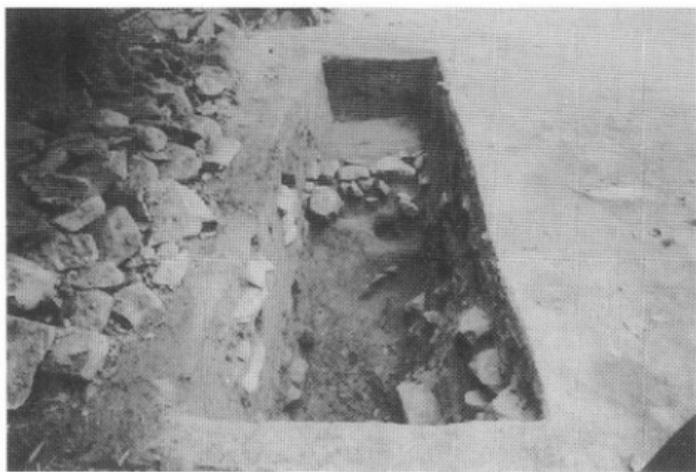
第25図 第5トレンチ検出状況（北西から）



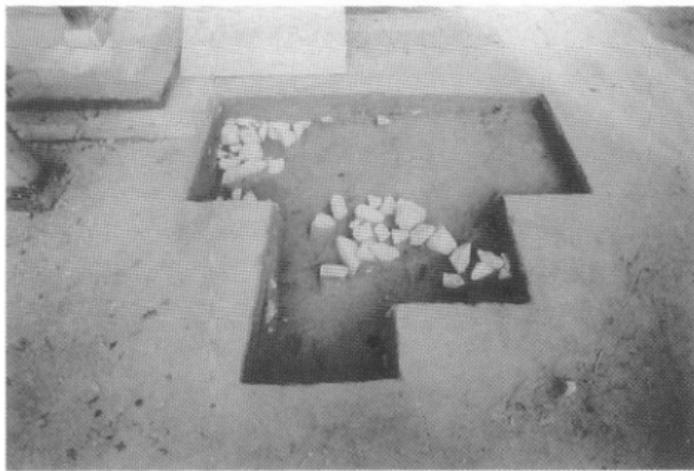
第26図 第6トレンチ検出状況（北西から）



第27図 第7トレンチ検出状況（北西から）



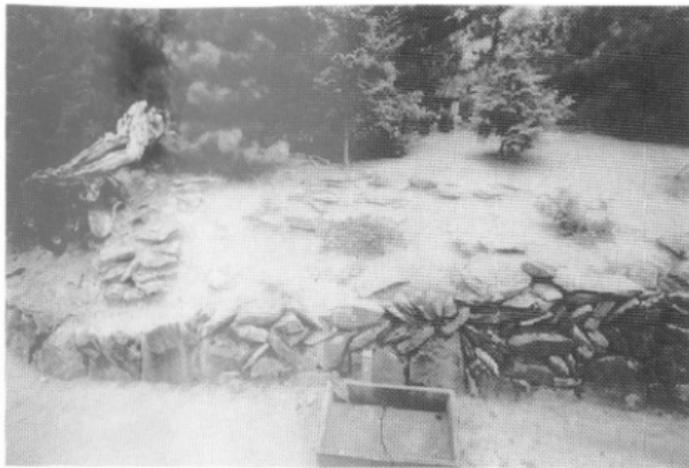
第28図 第8トレンチ検出状況（西から）



第29図 第9トレンチ検出状況（西から）



第30図 御館神社と境内に残る墳丘（西から）



第31図 御館神社境内に残る墳丘（南東から）



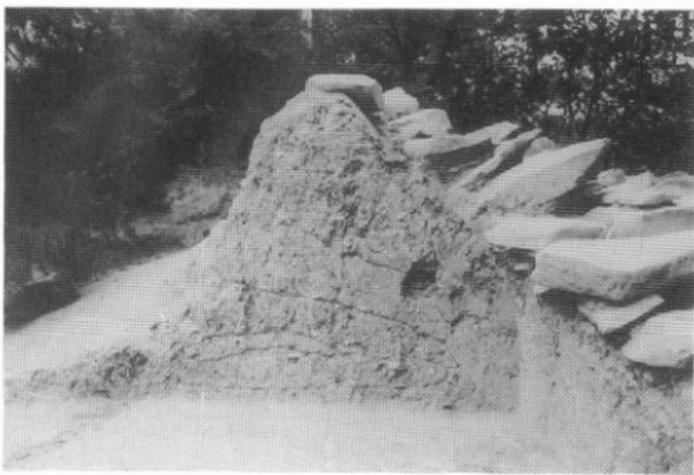
第32図 壇穴式石室発掘調査作業状況（南東から）



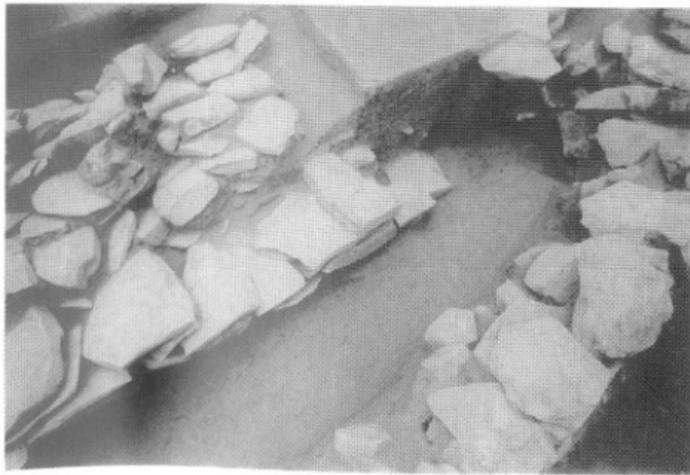
第33図 穫穴式石室完掘状況（南東から）



第34図 調査後整備された竪穴式石室（南東から）



第35図 穹穴式石室掘方・南西端壁部（南東から）



第36図 穹穴式石室北東端壁部の石材抜取跡（南から）

## 御館神社古墳発掘調査報告

—普通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成5年3月31日発行

編集 香川県普通寺市文京町2-1-4  
発行 普通寺市教育委員会文化振興室

印刷 徳四国工業写真